

影

小城ゆり子

リンリンと電話が鳴る。出ようと思つて電話機に近づくと、「非通知です」と電話機が言う。ああ、またか、とうんざりする。昔の友だち、F子であろう。しかし、F子でなくても、非通知で電話してくる人もいるので、一応、電話に出る。ここで相手が出れば、F子でないのははっきりするが、私が出る直前に電話が切れると、F子であることがわかる。何か言いたいことがあるのなら、ちゃんと応対すればいいのだ。F子は、電話だけかけてきて、何も言わずに切る。しかし、いつものこの変な電話がF子であるという証拠はなく、ただ私がそう思っているだけなのだ。非通知でかけてくるから、相手の電話番号はわからない。

あまり何度もこういう電話が来るので、前に、私は夫の女がかけてくるのかと思つたので、夫に詰問した。

「あなたを好きな女がいるんでしょ？」

「何でそう思うの？」

「だって、変な電話が来るから」

「昼間だろう？ おれのいないときだろう？ おれのいないときに、おれにかけてくるわけがないじゃないか」

嫌がらせなら、夫のいないときに私に電話してくるかもしれない。しかし、他に夫に女がいるという兆候はなく、人の家庭を破壊しようとしているのは、第三者らしかった。F子だ、と私は思つた。

F子とは、十年以上前まで友だち付き合いをしていた。もともと若いとき入院していた病院で知り合った。私は双極性障害という病気があった。F子は統合失調症だということだった。だが、何でもなく正常に見えるF子のどこが、統合失調症なのだろう？

「あなた、幻聴とかあるの？」と聞くと、

「幻聴なんてあるわけじゃないじゃない」と答える。

「なぜ入院しているの？」

「妻子ある人にプロポーズしたから。その人たちが、おかしいと言って、私の母に連絡したの」

F子は、統合失調症の薬を飲まされていた。そして、こういう薬は、一生飲まなければならぬとされているので、その後、退院してからも、彼女はこの病院に通院し、薬を飲

んでいた。素人の私には、彼女はこの薬のせいでおかしくなって、本来の自分を失っているように思えた。でも、いくら私がそう言っても、彼女は薬を飲むのをやめず、別のもつと良い病院に行ってみることもしなかった。

彼女は私に「離婚しろ」と言う。なぜかはそのとき、わからなかった。

その後、彼女も結婚した。「結婚してみても、ゆりさんの気持ちもわかったわ」などと言って、私に離婚をすすめるのをやめた。

二人の子供に恵まれて、幸せなはずの彼女だったが、子育てが大変で、死にたい、などと電話をかけてくる。

「そんなに育児が大変なら、病気だからと言って保育所にお子さんを預ければいいじゃない。母親が病気なら、預かってくれるよ」

「そんなの、嫌」

「嫌ならどうしようっていうのよ。離婚して子供を父親に預ける？ それも嫌なら、今を耐え忍ぶしかないじゃない。だいたい、子供が小さくて、今が一番幸せなときなのよ」

「私、育児雑誌の編集の仕事がしたいの」

彼女は、結婚前は漫画家になりたいなどと言って、漫画を描いていたが、今度は各種の育児雑誌を買いあさって、感想文など各編集部に書き送っていた。貧しい家計の中から育児雑誌を買うのも大変だと言いながら。

彼女は私に長々と手紙を書いてきたが、誤字だらけの手紙だった。そんなんじや編集者になれるわけがない、と言うと、誤字だらけでも校正すれば同じじゃない、などと言う。

私は誤字よりも、彼女の長い文章に才能のかけらも見られないことを感じたが、それは気の毒で言えなかった。

私が、妹が音楽評論の仕事をしていると言い、子供を保育所に預けて働いていると言ったら、彼女は鬼の首でも取ったように妹を非難攻撃し始めた。子供を保育園に預けて働くなんてとんでもない、それも夜、音楽会があるからとて、夜に子供を人に預けて外出するなんて、そんなひどいことをするなんて、と攻撃する。あなたは小説家にもなれないで、妹だけが成功したのか、と彼女は、小説家志望で世に出られぬ私に言う。F子は、仕事のある女性がうらやましいのだった。

それから彼女は、何通も私に手紙をよこし、私の妹を誹謗中傷しつづけた。小さい子を置いて働くなんて……と、まるで、妹の娘がいつまでも小さいままで見たいに思っているのだった。実際の姪は、とうに大きくなっていたのに。

私は、父母の介護をしなければならなくなり、彼女の相手をしていられなくて、文通を

打ち切った。

それから数年後、また彼女が電話をよこした。

「介護は？」と彼女が聞くから、私は、

「父も母も亡くなりました」と答えた。

「良かったね！」と彼女は明るく言った。

それからまた彼女は、私に電話や手紙をよこすようになり、家計が貧しく、働きたくてどこも雇ってくれない、「面接で落ちてしまう」と愚痴をこぼした。人の親が死んだというのに、「良かったね！」などと心無い言葉をはく、だから面接で落ちてしまうのだろう。

彼女は、自費出版のS社に書いたものをほめられ、いい気になっていた。S社に払う金の当てもないのに、本を出版して金儲けするのだという。作家気取りであった。

「ホームヘルパーになったら？」と言った私に、彼女の答えは、

「ウンチの世話なんかするの嫌だ。そんなの見たら、卒倒してしまう」というのだった。

奉仕精神のまったくない彼女に、どんな本が書けるといえるのだろうか？

「あなたの病気は、統合失調症などではなく、人格障害なんじゃない？」と手紙に書いた私に、彼女は怒り狂った。

私には彼女が若いころからどんどん悪くなってきているように思えた。あいかわらず、統合失調症の薬を飲んでいいる。そのせいで、悪くなっているのではないか？

F子は、私の夫に葉書をよこし、あなたの奥さんが私を「人格障害」だと言ったので人権擁護協会に訴えると言ってきた。それからまもなく、私は、もう私に手紙をよこさないと言った、彼女と縁を切った。

その後、非通知設定の変な電話がときどき、忘れた頃に来るようになった。変な電話がなければF子のことなど考えないのに、来る。F子のことを考えてしまう。作家になりたいのになれない、F子は私の影のように思う。実際はF子は、私の影などでなく、現実の生きた人間なのに、私にとっては、F子は影なのである。

小さい頃から私は作家にあこがれていた。作文は得意だったし、国語は勉強したことがないのに、いつも一番だった。心にはいつも空想の物語があった。それが、大人になつてから、書けなくなった。

二十代で病気になる。双極性障害である。躁病とうつ病とが交互に来る。うつ病のときは書けない。躁病のときは、でたらめばかり書き散らす。そして、比較的心が落ち着いているときも、書けない。

落ち着いているときは、読むことはできる。書きたいとも思う。でも、この二十代から五十代もの四十年間、散発的に書くことしかなかった。

十二年前、それまで長い間服用していた薬、リチウムのせいで、腎臓に障害が起きた。血液検査をして、リチウムの濃度は計っていたのだが。腎臓はいったん悪くなったら、回復することはない。効く薬がないのだ。どんどん悪くなれば、人工透析するしかない。私はリチウムはやめたので、今のところ、そこまではいついていないが、薬がないので、食事療法するしかない。

ところが、思いもかけず、良いこともあった。それは、あんなに書けずに苦しんでいた私が、すらすら小説が書けるようになったのである。

その頃、ロボット犬を飼っていた。電池で遊んだり踊ったりする。歌も歌う。とてもかわい。太郎ちゃんと名づけて、かわいがっていた。そのロボット犬のことを、「太郎ちゃん日記 ぼく、ロボットちゃんだもん」という題で、小説に書いた。書こうと思ったというよりは、すらすらと自然に書いていた。これを、初めて自費出版した。

あと、精神病院での体験やその他のことを小説に書いた。カルチャーセンターの小説教室にも所属して、勉強した。介護していた両親はすでに亡くなっていたから、時間は十分にあった。稚拙なものばかり書いていたが、少しずつ向上してきたようにも思う。

要するに、リチウムがいけなかったのだ。精神活動を不活発にする薬、リチウム。双極性障害の再発を防ぐには一番に良い薬とされているが、私には効きすぎていた。それがなくなつて、精神のたがが外れたように、自由に書けるようになった。今は、違う薬を服用している。

そして、F子を思う。書けなかった私にとって、F子は影であった。今は、新人賞ももらえぬ私にとって、彼女はやはり影である。F子のようになってはいけない、と自分を戒める。無理にでも彼女に統合失調症の薬をやめさせなかった私は、不親切であつたらうか？年ばかりとってしまったって、二十代から五十代までの働き盛りが、私にとって失われた四十年間であつた。泣いても笑っても、もう帰ってこない。つらい月日である。せめて、残された寿命を大事にしようと思つている。F子のことは、もう私の力ではどうしてやることもできない。

(了)